布流津（ふるつ）富津市

時をめぐる岬の歴史

富津岬には市の名前「ふっつ」にまつわる伝説が語りつがれています。日本武尊と弟橘媛の神話（布流津）をはじめ、民話や歴史、富津岬が歩んできた時をめぐります。参考文献：中嶋清一著「富津市の民話と民謡」

「ふっつ」の由来

ふつ津　古い津という意味で、中世の文書にある「ふんと」と同意。
ほと　古語で突き出た所のこと。富津岬の地形から考えられた説。
ふつ　刀を振ったときに発する音で神を刀とみて言力と結びつけた説。

第一海堡・第二海堡

東京湾海堡は、明治維新後の国防に伴い、海外からの侵略に備えて人工島を築いて、砲台を設置した。富津岬と観音崎を結ぶ東京湾に3つ建設されたが、横須賀市猿島の第3海堡は平成19年に撤去されたが、いずれも立入禁止。

明治百年記念展記念碑

五葉松を形どった展望塔

富津元洲堡塁砲台（中の島）

東京湾口防備のため明治14～17年に造られた。砲台は砂を盛り上げて二階建あるいの真土で覆い、周囲に濠をめぐらせた。上部に28cm榴弾砲と12cmカノン砲を備え、明治27年日清戦争で第一海軍とともに黄海海戦に参戦した。

富津外堡　昭和初期に設けた監視所といわれている。富津岬には当時の遺構が多数存在する。

日本武尊と弟橘媛伝説（黄泉神神社）

古事記・日本書紀で伝えられる日本武尊が東征（東国）を大和朝廷の支配下にしたときのこと。

走水（三浦半島）から船出して上総国（房総）へ向かった日本武尊は、大風により難破しそうになった。お付そしていた妃の弟橘媛が日本武尊の身代わりに海神の心を鎮めようと入水し荒波を鎮め、無事に日本武尊は上総国へ上陸した。そのとき弟橘媛が身につけていた衣だけが漂い、ここ場所が富津岬の布引海岸と伝えられ、布流津（富津市）の由来となっている。その次は、海岸沿いの貴布祢神社に祀られ、現神には弟橘媛命布津姫命がある。

また、その7日後に弟橘媛の櫛が大貴の岩洞窟岸に流れつき、どこからか一頭の鹿が現れて櫛をくわえ、走水の海が一望できる吾妻山の頂き（吾妻神社）までかけ上がったといわれている。

吾妻神社　弟橘媛を祀った神社。9月敬老の日前日の日曜日に、地域を神馬（オメシ）と神輿が宮廻りし、岩屋観音や神馬が疾走する盛大な祭りが行われる。

お食事フェア【旗のある店】

海堡丼　※開催時期は
はがりめ　商工観光課へ
生のり　問い合わせてください。

観光開設

海干狩場　3月中旬～9月上旬
海水浴場　7月中旬～8月下旬
ジャボテ プール7月中旬～8月下旬
キャンプ場　7月上旬～8月下旬
テニスコート　通年

開花時期

桜　3月下旬～4月上旬
ハマヒルガオ　5月中旬
藤棚　5月上旬

富津漁協（現在は金融）

東京湾岸部の「天然魚貝類の漁場」を開発し、約3年間（1年目は開墾）、約2年間（2年目は開墾）、約1年間（3年目は開墾）、約2年間（4年目は開墾）、約1年間（5年目は開墾）、約2年間（6年目は開墾）、約1年間（7年目は開墾）、約2年間（8年目は開墾）、約1年間（9年目は開墾）、約2年間（10年目は開墾）、約1年間（11年目は開墾）、約2年間（12年目は開墾）、約1年間（13年目は開墾）、約2年間（14年目は開墾）

富津ふるさと展示室・大日本吹き硝子所（富津公民館）

昭和で完成の大日本吹き硝子（ガラス）製品を展示。ガラス工場は、ガラス製品を展示室、ガラス工場は、ガラス製品を展示室、ガラス工場は、ガラス製品を展示室、